

公益社団法人水戸青年会議所

2024 年度 理事長所信

公益社団法人水戸青年会議所
第 72 代理事長 大久保 惣太

スローガン

いつもあたたかく いつもあたらしく

基本理念

Beyond the Border

先駆ける人材による

国際都市水戸の創造

基本方針

- 1・個性輝く能動的な人材育成
- 2・未来を想像し思い描くまちづくり
- 3・グローバル人材がつくる多文化共生社会の実現
- 4・地域から愛される盤石な組織へ
- 5・リーダー輩出に繋げる会員拡大
- 6・夢ある未来へ繋ぐ承継と信頼の組織運営

【はじめに】

幸せとは何か。その答えは人それぞれでしょう。私が何不自由なく恵まれた生活を送れたのは紛れもなく両親のお陰ですが、その時代、環境を享受できているのは戦後日本国の復興に力を尽くした人々のおかげであります。そして1953年に水戸青年会議所が創立してから71年、この長い歴史の中でその時代その時代の課題に真摯に向き合い、人のため、まちのために活動されてきた諸先輩方がいらっしゃったからこそ今の我々があります。

かの有名なチャールズ・ロバート・ダーウィンが残した「生き残る種とは、最も強いものでも最も賢いものでもなく、最も変化に適応したものだ」という言葉があります。これは、変化に適応する者が優れているという意味ではなく、変化に適応した者が生き残れるという意味です。現代社会に置き換えて考えてみると、移り変わりの早い社会の中で生き残っていくためには、変化に適応していく能力が求められています。例えば、近年のコロナ禍では、衰退したものがあ一方、発展したものや新たに生まれたものもあります。

我々の生きる今まさに社会の仕組みや経済活動の在り方、教育や暮らしも急激に変化しています。そのような時代の中で常に変化への適応は勿論のこと、自ら変化を生み出す存在として運動を起こしていかなければなりません。課題を発見し仲間と共に切磋琢磨しながら今までの常識に捉われることのないあたらしいアイデアと手法で課題に挑戦し解決できるのが青年会議所です。幸せに生きられる社会を作ること、それが我々青年の使命であると私は信じています。

【まちの未来を輝かせる人材育成】

青年会議所は単年度制の縦割りの組織の中で奉仕・修練・友情の三信条を掲げて明るい豊かな社会の実現のため、すなわち自分たちの住み暮らすまちを少しでも良くするために日々活動をしています。各々毎年違う役職に応じた役割があることは言うまでもありませんが、その役を本気で演じ切れているのでしょうか。「私にはできない」と自分で境界線を引いていないのでしょうか。役職は違えどそれぞれがリーダーシップを発揮する場面が必ずあるはず。また、最高のチームワークを発揮するにはリーダーを支えるフォロワーの存在が欠かせません。フォロワーシップが本物のリーダーを育てるとも私は思います。リーダーシップとフォロワーシップをそれぞれが理解し発揮することでより良いまちづくりのできる人材の育成に繋がります。

内閣府が発表している日本を含めた諸外国のこどもたちを対象とした自己肯定感の意識調査において、日本のこどもたちの自己肯定感が先進国では最も低い調査結果となっています。背景として自己肯定感を低下させてしまう教育の在り方、大人の指導の仕方の一因があるのではないのでしょうか。学校のテストで輝く子もいれば運動や芸術、音楽、学級委員などで輝く子もいるはず。まちの将来を担うこどもたちが将来それぞれの分野で輝ける社会こそが明るく豊かと言えるのではないのでしょうか。

水戸青年会議所の継続事業として交通安全啓蒙を主軸に開催をしてきた「ちびっ子広

場」ですが自動車の安全機能の技術革新もあり重大な交通事故が減少していることは周知の事実です。しかしコロナ禍が明けこどもの事故件数自体は徐々に増加傾向にあることも報告されています。交通安全という軸はそのままに、「ちびっ子広場」という名の通り「ちびっ子」が自ら考え、自分から取り組むなどの主体的な学びの場を提供し子どもたちが輝ける場を創出してまいりましょう。また、公益社団法人としてのメリットを最大限活用し持続可能な事業のモデルケースを構築していきましょう。

【未来を見据えたまちづくり】

私は、これまでに青年会議所のもつ出向の機会を通じて日本全国各地のメンバーそして世界各国のメンバーや訪れた国の財界や政界で活躍されているリーダーと会って話す機会がありました。日本各地、そして国際社会で活躍するリーダーたちと交流して感じたことは、自分の地域やまちに希望をもって明るい未来を語る人が多かったことです。自分たちは今起きている問題ばかりに目を向けていないでしょうか。現在進行形の課題解決も勿論重要であります、まちの未来を想像しそこから逆算してまちの発展を思い描くことも重要なのではないのでしょうか。

2022年に水戸青年会議所創立70周年を迎えた際に「水戸未来ビジョン2022」を掲げ次の10年の指針を発表しました。しかし、発表しただけではまちに変化は訪れません。2023年度に水戸市へ行った提言も踏まえ、我々がまちの未来についてより具体的で夢あるアクションプランを掲げ行動を起こしていきましょう。そして行政や政治家、市民を巻き込み希望溢れる未来を描ける人を増やすことでまちの発展へと繋げてまいりましょう。

また、2020年より我々の活動エリアとなった大洗町には多彩な食文化や多くの観光資源があり繁忙期には県内外から多くの人が訪れ賑わっています。

現在はまちのもつ資源を活かした観光スポットが形成されていますが、施設単体を目的とした利用者が多いため周遊性に課題があります。またシーズンによってばらつきも大きい現状もあり閑散期の賑わいの創出も必要です。さらなる観光振興によるまちづくりを行っていくには、現代のニーズに合わせて大洗のもつ観光資源や歴史、食文化にさらなる磨きをかけ、多様な人々との連携を図りながら、SNSなど様々な媒体を通じて効果的に情報を発信しまちに周遊性を持たせる仕組みをつくり交流人口を増やしていくことが必要です。観光への取り組みとともに地域経済への効果を最大化させ、大洗町の活性化へと繋げていきましょう。

【ローカルからグローバルへ】

青年会議所の魅力の一つに国際の機会があります。私はその機会を活かして2022年度にアフリカのウガンダ共和国を訪問しました。舗装されていない悪路に多くの露店が並び、決してきれいとは言えない川の水を汲んで利用している人々、そして現地の子どもたちとサッカーをした際には靴を履いていない子さえいました。日本にはないその光景を目

の当たりしに驚愕したことを今でも鮮明に覚えています。しかし、農業が主要産業のこの国では食べるものに困ることは少ないせいこまちは活気に溢れ人々の笑顔がとても印象的でした。豊かさとは何かと改めて考えさせられると同時に国際協力を含め国境を越えた広い視野で物事を考え行動していくことの重要性に気付かされました。

水戸青年会議所では2016年に「国際アカデミー」を開催し、2017年の台湾の嘉義国際青年商會との姉妹締結を契機に国際への機運が高まりつつありました。先のパンデミックを乗り越え昨年には世界との交流が再開し全国的にもインバウンドへの期待が再び高まっています。昨年度我々は国際コンベンションの誘致の指針を打ち出し動き始めました。地方都市での国際コンベンションの開催には長期的な取り組みが必要であり、まちの国際化は一朝一夕に完成するものではありません。国際コンベンションを誘致する我々の過程において行政や他団体にも我々の考えを共有するとともに市民に対して国際交流の場を創出し地域の醸成をしていくことも重要です。

そして、グローバル化が盛んに叫ばれる現代ではヒト・モノ・カネが国境を越え地球規模でのビジネス・生活が当たり前になっています。水戸市に住み暮らす外国人数は約3,700名で水戸市の人口の1.4%に過ぎないが年々増加の傾向にあります。今後生産年齢人口の減少が予測されているこのまちを持続可能なものとしていくためにはその時代が来るであろう若い世代が多文化共生社会についても学び準備していく必要があるのではないのでしょうか。

また、2017年に嘉義国際青年商會と姉妹締結を結んでから7年目の年となります。お互いを尊重しながら交流が続いている今、相手国の課題、まちの課題、どんな事業をしているのかを知っているメンバーはいるでしょうか。今一步踏み込んで国境を超えた学びのある国際交流をしてさらなる友情を育んでいきましょう。

【未来を見据えた会員拡大】

近年水戸市の人口は27万人を切り、2040年から2045年頃には9%から12%の人口減少が見込まれています。また、老年人口は49.8%の増加が見込まれているのに対して年少人口（0-14歳）は32.2%減少し生産年齢人口（15-64歳）も22%の減少が予測されています。この超高齢社会においても県内最大の事業所数を有する水戸には我々のまだ見ぬ仲間がいるはずで。志を同じくする仲間が増えれば我々の運動も飛躍的に伝播することができます。同じ目標に向かう仲間を増やし切磋琢磨することで個々のスキルアップひいては組織の活性化を図る必要があります。2022年度構築した「水戸プラットフォーム」のツールとしての活用、日本全国の成功事例の活用、卒業された先輩諸兄姉と連携を深めるなど、様々な手法を模索しながら、これまでになかった手法をも取り入れて未来を担う人材を発掘しましょう。

そして、在籍年数が3年未満のメンバーが4割を超える現状を踏まえ、候補者、新入会員を含めたすべてのメンバーに対し、JCならではのあたたかい交流、あたらしい研修の機

会を最大限に創出し、自己成長の機会を多く提供することで、個人・組織両面での成長を最大化させ持続可能な強い組織基盤をつくっていきましょう。

【持続可能な組織へ】

公益社団法人としての運営を始めて10年が経ち、この間、公益法人格を有することの利点・問題点が整理されてきています。しかし我々は公益社団法人としてのメリットを活かしきれているでしょうか。メンバーやOB企業からの寄付のみならず外部資金の獲得に向けた手順やルールを整備し周知徹底し運用していくことでメリットを最大限活かした持続可能な組織の仕組みづくりをしてまいりましょう。また、我々の運動に共感いただきご協賛いただいている方々に対して目に見える効果の還元と感謝を忘れてはなりません。

また、昨年度より検討している公益目的事業の追加申請についても未来のまちの課題を考慮しながら引き続き慎重に議論を重ねていきましょう。

そして、公益法人として求められる社会的責任を果たすために、定款・諸規程を遵守することは勿論のこと、メンバー一人ひとりが社会倫理に沿った言動を心掛ける必要があります。高い公益性と透明性を備えた健全かつ円滑な組織運営を行うことで市民からより一層の信頼を獲得していきましょう。

【規律のある組織運営とファンづくり】

71年もの歴史をもつ水戸青年会議所では常に厳格で規律のある組織運営がなされてきました。質が高く効率的な会議は質の高い事業の構築へ繋がります。言い換えれば我々の運動構築の良し悪しは質の高い運営にかかっていると言っても過言ではありません。これまで培ってきたガバナンスを継続的に強化していくことは勿論ですが、厳正で充実した会議を行うために、法令や青年会議所内のルールを遵守して適切かつ公正妥当な運用を行うことで、私たちの運動や活動はまちの人々から支持され、社会的信用を得ることができます。単年度制でありながら、組織としての一体性、連続性を確保し安定した組織運営を行ってまいりましょう。

また、水戸青年会議所は市民にどの程度認知されているでしょうか。我々が行う運動、事業は市民に届いているでしょうか。そして我々の住み暮らすこのまちの魅力は日本国内、世界各国に届いているのでしょうか。素晴らしい運動をしてもそれが社会に伝わらなければ意味がありません。運動に興味、関心をもってもらい共感を得ることが大切です。これまでの広報手段を検証し、あたらしいアイデアを取り入れてスピード感をもって積極的に運動を発信し、水戸青年会議所のファンを一人でも増やしていきましょう。

【JCが提供する成長の機会】

JCは単年度制という仕組みが、普段の生業からは得られない様々な体験にチャレンジできる機会と、新たなる出会いを提供しています。この自己成長の機会と、その先に生まれ

る深い友情を育めることが、他の組織では決して模倣することのできない魅力です。

また、JCI（国際青年会議所）、日本JC本会、地区協議会、ブロック協議会への出向という仕組みが、LOMとは違った体験を得られる機会を提供しています。さらに、全国の仲間と出会うだけでなく、各LOMの文化を垣間見て、自らのLOMを客観的に見ることができ、メンバーの視野を広げる機会にもなっています。そして、自己成長を遂げたメンバーが得た知識・見識をLOMに還元し、より質の高いまちづくりの担い手となる好循環を生み出しています。出向者一人ひとりの成長は必ずLOMの力となります。そしてその出向者をLOM全員で支えていくことが我々の組織力向上に繋がるのです。

さらに我々の姉妹LOMである台湾の嘉義国際青年商會を始め世界中にJCの仲間たちがいます。一人ひとりが国境を越えた世界との絆を作ること、すなわち民間外交を通じて平和な世界を築くことも我々の使命であると考えます。

【おわりに】

私にとって青年会議所での活動は挑戦の連続です。

JCは人生最後の学校、学び舎とよく言われます。どんな場面でも学びの機会です。青年経済人として、人として大切なことを学べます。そして困ったとき、悩んだ時、壁にぶつかった時に必ず助けてくれる一生の友にも出会える場所です。

たかがJC、されどJC

一度きりの人生

自分がどんな人間になりたいのか、どんな人間でありたいのか意識しよう

一歩背伸びをして頑張った先には必ず成長がある

一生懸命取り組んだあなたは周囲からの信頼を得られる

明るい豊かな社会の実現はあなたの力にかかっている

家族のため、仲間のため、市民のため、日本のため、ひいては世界のために

自分以外の誰かの幸せのために行動しよう

ひとりひとりを大切に

人の痛みを自分の痛みとし

人の喜びを自分の喜びとする

変革を恐れず、新たな創造を

いつもあたたかく いつもあたらしく